

廿八年度の卒業生は實によく團結した組であつた。それが今度の桑山君の悲劇の場合にも美しい企としてまとまつたのである。追悼記念誌發刊のこと、駒澤史學會の發起とすることなど、十一月十四日の史學大會の後、催された追悼會ですぐまとまつた。そして同期生の醜金を基として、史學會と桑山家の共同出費で刊行することとなつた。それに先輩後輩の若干の寄附も加はることとなり、計画は順調に進んだ。それで宗門の各方面からも、非常な同情を以て、画やその賛文や、法語や、詩歌を多く寄せられ、編輯子としては、感謝の辭を知らない位である。

中に就いて全体豫算の都合上、紙數に窮窟なところから、折角お寄せ戴いた玉稿を部分的に若干割愛して頂かなければならないことが起り、甚だ以て相濟まぬことは存じながら、多少縮小をさせて頂いたことを御許し願いたい。中でも高階管長猥下お染筆の賛と鈴木雷峯八十四老師の觀音圖は掲載紙幅の都合上、非常に縮圖せざるを得なかつたことを御寛恕戴きたい。この一幅は題字色紙と共に、永く桑山家の寶物となつて残ることであらう。桑山君の卒業論文を載せたのは故人の遺業を記念する意である。その指導に當られた玉村君は再校閱の勞を惜まなかつたばかりでなく、論文讀後感を寄せて呉れた。師として見た故人の學究態度を觀察され、故人の選んだ論題が、學界に於いて未開拓分野であつたことをあげ、その研究の必要であり、而も困難である問題と取組んだその頃の師弟の事情に言及し、そしてその成果の批判と未完成のまま残された故人の業績を惜み、なほ春秋に富める故人に與ふるに年時を以てせば、大成の

域に達せしやも知れぬことをなげかれ、誰かこの後継者の出づることを念願して筆を擱いてゐる。

宗務廳から遠藤教育部長、大本山總持寺から大道監院、同前安藤監院、可睡齋から鬼頭後堂、前住永江老師を始め、地元横須賀の諸寺院尊董方々から各自各様、金玉のお辭を賜つたことは、故人の靈を慰むるに十分なるものである。大學から衛藤總長、山田學監等諸老師、佐藤教授小西講師等、亦同期及び後輩の諸君よく故人を偲ぶの情を述べ編輯子をして泣かしむるものがある。この追悼記念誌編纂事業に對し、尊父桑山晃道師は、故人の愛用藏書一切をあげて、わが史學研究室に贈與された。この美學に對し編輯子はこれに故人の名を銘記して、永久に保存し後輩の利用に便することを約する。

本書編輯に當つて、桑山家との連絡、印刷所との折衝、原稿の整備、醜金のための交便の往復等あげて藤井秀夫、安本利正の二君に負ふところ絶大である。桑山君の卒論を印刷所に渡すために玉村君の校閱済の原稿の淨書には、學生殿村立雄君の手を煩はした。それから校正等の仕事並びに一切の雜用は、研究室の學生諸君の助力を頂いた。記して以て深甚な謝意を表する次第である。併せて左記の同窓諸君の協力に俟つもの多かつたことを附記して謝辭に代へる。

大庭實、西永成、西幸保、鮎田龍全、高橋久男、加藤茂男、川村尙道、大澤義三郎、下孝雄、永江昭隆、久家幸一、佐々木弘元、東元伊都子、牛頭哲哉、依田賢三の諸君。

昭和三十年二月廿五日 印刷  
昭和三十年三月一日 發行

(非賣品)

發行所 駒澤大學文學部史學研究室

印刷所 新宿區調訪町二七番地

中島印刷所